

J2.992:5

5 of 9

* Matsukaza

67/14
C

松

風

内
十
ノ
三

221

サシは聲を内へ取り稍朗かめに、「面白や」

と氣を替へさしく晴れやかにさうりと、秋の淋

しさを含みて、ツレとの掛合は氣を替へさうり

めに、ロギは伸んびりと朗かに、次のツレとの掛合

は調子を内へ取りて閑かに、「げにや思ひ内に

あれば」より愁傷の心はつとつとと出で、グ

ドキはだれぬ様に「三瀬川」と一寸間を置き

しつとつと誤ひ出し、「あら統しや」と氣を交へ

朗かにはつさうと張りて、「いぞ参らう」下り狂

氣の心は、ツレとの掛合晴れやかに稍さうと、

「稻景の山の」と稍緩め締めて誤ひ、「それは」

と乗つて朗かに誤ふべし。

△ツレ シテとの連吟はシテの位に従ひ、この句は

調子を高めてさうりと、ロギ後の詞の掛合も

さうりと、グドキ後のシテとの掛合は餘りさう

く」と誤はず、シテより軽く誤ふ、切の掛合

はさうりと誤ふべし。

△ワキ位を重く取らず閑かに出で「さうは

この松は」と寸と間を取り誤ひ、以下しつとつ

と、「出家と申し」以下ダレ又様に誤ふべし。

△地初同はシテと調子を替へ閑かに出で、上

歌は調子を張りめに心持多し、凡てしつとつと淋

しく、この句「寄せては」と氣を掛け、引立て、さう

りと出で、以下緩急多し、ロギは氣を替へさう

りめに朗かに出で、段々さうりと、「松風も村雨也

調子を交へさうりと出で段々と閑める心、上歌よ

り引立て、閑かにたづなりと、グセは抑へて出で、落

ぬ様に閑かに、上端より伸んびりと朗かに緩急あ

り、留を閑めて、「立ち別れ」と鹿はしく大きく、「こ

れはなつかし」とさうりと受け、朗かにうつきり

と、大きく長閑に誤ふべし。

語釋

行平…阿保親王の御子にて在原業平の兄、正

三位中納言に至る。仁和三年須磨に配流せらる。

わざとは它ひてこそ…須磨は左遷に達ひ、

かとりなきぬの云々…かとりは、細末に薄く織

りたる織物のこと。空想とは、あたりをにははず

薫物の意。

松風

觀阿弥清次作

曲柄 三番目 變物

季節 九月

稽古順 一級

所 攝津國神戶須磨浦

梗概

諸國遊歴の僧(ワキ)西國行脚の途次、
攝津國須磨浦に立ち寄り、由ありげなる
磯辺の松を見て、松風、村雨の旧跡なりと聞
き、經念佛して回向し、やがてある鹽屋に一夜
の宿を求めぬ。

さる程に二人の海士少女(シテ、ツレ)汐汲車を
引きて汀に出で来り、けかなき景を歎きつ、
も、秋の月の水に映る面白さにうち興じて、汐を
桶に汲み入れ、汐屋に歸りぬ。僧乃ち一宿を講
ひ、先程磯邊にて松風、村雨を弔ひたる由を
語れば、二人の海士少女、眞はわれ等こそその
幽霊なれとうち明け、その昔、行平朝臣に
召し出だされて、縁の衣に空焼する幸ひを得
しが、三年の契り程もなく、行平は都に立ち歸り

間もなく世を早くし給ひぬと聞きしより、愈
慕の亡執今もなほ晴れぬなりと語り、松風
は殊に心も乱れて、形見の烏帽子狩衣を身
につけて、思慕の情を舞に奏すと見しほどに
夜は明けて、二人の姿は夢と消え失せぬ。
諒ひ方

本三番目の閑かに美しき曲にして、優麗
を主とすれば、賤しき延乙女なれば上品に過
ぎず、気合心持等の変化もあれど、これに重
きを置けば四番目物の様になり、本三番目
の位を失ふなれば、よく注意して諒ふべし。
△シテ本の眞の一聲は初能、即ち神祇物の
外は此曲一番のみにて、彼は陽、これは陰なれ
ば、調子は抑へても聲は美しくし」とりをおで、

松風 マツカゼ

素謡座席唄

ワシツ
キテレ

早僧詞 ササウチ

これは諸國一見の僧にて。われ
未だ西國を見ず。程に。この度思
ひ立ち西國行脚と志して。あら
嬉しや。急ぎ。程に。これは。や
津の國須磨の浦とかや申し。こ
ゝこれなる。磯邊を見れば。様あり

松立臺

丸臺に松を立て舞臺の正面に出す、小書あるとき松に短

冊綴もあり、

汐汲車

高サ五寸五分中九寸、奥行一尺三寸、輦一尺四寸、両輪一尺三寸

徑の車を紅緞にて飾り、水桶を一載す、ワキ着座の後これを

後見持おで舞臺見付柱の

手前に置く、

小立烏帽子

シテ物着てこれを頭にす、

水桶一つはツレ持つ。

装束附(松風)

ワキ旅僧

角帽子 着附無地熨斗目 水衣
腰帶 扇 數珠

ツレ村雨

面連面 鬘 鬘帶 襟赤
着附摺箔 紅地縫箔腰卷 白水衣
胴箔腰帶 扇

シテ松風

面若女 鬘 鬘帶 襟白二
着附摺箔 紅地縫箔腰卷 白水衣
胴箔腰帶 鬘扇
物着ニ 女小立烏帽子 長絹

作物

丸臺 松立木車

小道具

水桶(松風用)二

げたる松のゆ。如何さま謂れ^{イワ}のな
き事はひま^マ。このあたりの人に
尋ねばやと思^{寛タリ}ひ^ヲ ^{マキカル上 スラリ} ^{ヨクヘ}さては^{シカク 拍子合ハス}この
松は古^{イニシエ}松^ツ風^ム村^ラ雨^サとて^一二人^ニの^ニ海^ニ士^マ
の^一舊^キ跡^ウか^セや^キ。痛^イは^ハ ^一や^ニその^ニ身^ニは^マ
土^ド中^チに^ウ埋^ヅも^レぬ^レども^一。名^ナは^ハ残^ニる^マ
世^セの^一 ^一る^ニし^マとて^ハ ^一愛^カら^フぬ^ニ色^ニの^マ松^ツ一^ツ本^マ。

下歌同
カヘテ
抄合

友もなしにや浮世の業ながら。
 殊に拙き海士小舟の渡りかねたる
 夢の世にほむとやいはんうたかた
 の。汐汲車寄るべなき。身は海士
 人の袖もに思ひを乾さぬ心かな
 かくばかり経がたく見ゆる世の中
 に。星次ましきも澄む月の出汐を

風

三

世に廻るはかなきよ 波こそもとや

須磨の浦 月さへ濡らす。袂かな

心づくしの秋風に海は少し遠け

れどもかの行平の中納言 閑吹

き越ゆると詠め給ふ浦わの波の

夜々はげに音近き海士の家。里

離れなる通ひ路の月より外は

シテサシ上ニ

サリ大ス

オエ

捨草徒らスチスチに朽ち増サり行く。袂タテかな

朽ち増サり行く。袂タテかな。シマシマ面白ウツクシや馴ナ

れても須磨スモの夕まぐれ。海士ウミシの呼ヨ

び聲コエ幽カスかにて。沖チにニふき漁イサ舟フネの。

影カゲ幽カスかなる月の顔カオ。雁カの姿サマや友トモ

千鳥チトリ野ノ分ワ心ココロ汐シ風フエ何ナニれもサげにニかる

所トコロの秋アキなりけり。あアら心ココロすスこの

いざや。汲まりよ。出汐をいざや。汲
 まりよ。お。影。心。恥。か。き。わ。が。姿。恐。び。車。を。引。く。汐
 の。跡。に。残。れ。る。溜。り。水。い。つ。ま。で。す
 み。は。果。つ。べ。き。野。中。の。草。の。露。な
 ら。ば。日。影。に。消。え。も。失。す。べ。き。に
 ら。れ。は。磯。邊。に。寄。り。藻。掻。く。海。士。の

嵐も音も夜寒何と過さん。
更け行く月こそさやかなれ。汲む
は影なれや。焼く塩煙心せよ。さあ
みなど海士人の憂き秋のみを
過さん。松島や雄島の海士の月
にだに影を汲むこそ心あれ。影を
汲むこそ心あれ。運ぶは遠き陸

○小謡

夜すがらやな　いざいざ　汐を汲

まんとして　行に満干の　汐衣の

ツレサリ

袖を結んで肩にかけ　汐汲むた

めとは思へども　へよしそれとても

シテ　矢ラカサリ　大「中」上歌同　引立サリ

女車。寄せては心歸るかたをなみ。

引立テ、

拍子合

ツタリ

ツメ

イ

古

寄せては心歸るかたをなみ。苦み邊

の。田鶴

ツル

ツル

ツル

ツル

ツル

ツル

ツル

ツル

ツル

ツル

の。田鶴こそは立ち騒げ四方の

甲シテ上ナレタル一又太一
 屋ヤラハ灘の汐汲む憂き身ぞと人に
 や誰も黄楊の櫛さくくる汐を
 汲み分けて見れば月こそ桶に
 あれこれにも月の入りたるや
 地トサリ喜しやこれも月あり月は一つ
 影は二つ満つ汐の夜の車に月
 を載せて憂いとも思はぬ汐路

奥のその名や千賀の塩竈 賤
が塩木を運びは阿漕が浦に
引く汐 地上 ー ウケテスラリ ー その伊勢の海の二見の
浦二度世にも岫でばや 松のむ
ら立ち霞む日に汐路や遠く鳴
海鳥 地上 ー スラリ ー それ鳴海鳥 ー は鳴
尾の松蔭に月こそさはれ 蘆の

ひが。一夜のお宿と仰せら^{シテ}餘りに^{閑カニ}

見苦き塩屋にてひ程にお宿

は叶ふま^{ツレサアリ}きと申しひへ^{アルジ}主にそ

の由申してひへば。塩屋の内見苦

しくひ程にお宿は叶ふま^{ツレサアリ}き由

仰せら^{ツキカマメニ}いやいや見苦き^{ツレサアリ}は苦し

からずひ^{ツル}出家の事にてひへば^{ヒラ}平に

から下へ 羊詞スラリ

わたや。塩屋の主の歸りてゆ。宿を借

えうかへ

らばやと思ひゆ。いかにこれなる塩

屋の内へ案内申しゆ。誰にてわ

ツレサラリ

たりゆぞ。これは諸國一見の僧

ワキ裕タリ

にてゆ。一夜の宿を御貸しゆへ

エ

ツレサラリ

暫く御待ちゆへ。主にその由申し

エアルジ

ゆべ。いかに申しゆ。旅人の御入り

えうかへ

タビビト

入^ニり^エゆ^{ワキスラリ}へ^ニあら^ニ嬉^ニしく^ニやさ^ニら^ニば^ニか^ニう^ニ

参^ニら^ニう^ニず^ニる^ニに^ニて^ニん^ニ ^{ニテ優ニ}始^ニめ^ニよ^ニり^ニお

宿^ニ参^ニら^ニせ^ニた^ニく^ニは^ニゆ^ニひ^ニつ^ニれ^ニど^ニも^ニあ

ま^ニり^ニに^ニ見^ニ苦^ニく^ニゆ^ニ程^ニに^ニさ^ニて^ニい^ニな

と^ニ申^ニし^ニて^ニん^ニ ^{ワキスラリ}御^ニ志^ニあ^ニり^ニが^ニた^ニう^ニゆ^ニ。

出^ニ家^ニと^ニ申^ニし^ニ旅^ニと^ニい^ニひ^ニ。泊^ニり^ニは^ニつ^ニべ
き^ニ身^ニな^ニら^ニね^ニば^ニい^ニづ^ニく^ニを^ニ宿^ニと^ニ定^ニむ

一夜^{チヤ}を明^アかさ^サせて給^{ツレ}はり^{カミスラリ}ゆへと
重ね^{カサ}て御^ミ申^シしゆへい^{ツレ}やかな^{カミスラリ}ひゆ
まじ^{ミテ}暫^{シカ}く月^{ツキ}の夜^ヨ影^{カゲ}に見^ミ奉^{ホウ}れ
ば世^セを捨^ス人^{ヒト}よしよ^ウかる^{サラシメニ}海^{ウミ}士^シの
家^ケ。松^{マツ}の本^キ柱^{バシラ}に竹^{タケ}の垣^ケ。夜^ヨ寒^{サム}きと
そと思^{オモ}へども^{エト}。蘆^{アシ}火^ヒにあ^アたり^ビて
お泊^{トマ}りあ^アれと申^シしゆへ^{ツレ}此^コ方^{ハタ}へ御^ミ

の海士アの舊跡マとかや申しの程に。
縁ギョクながら吊エンひてこそ通りトムラの
ひつれ心持シあら不思議や。松風村雨の
事を申してゐへば。二人ユともニにニ愁シウ
傷シヨオの。これは何ナニと申したる事にて
ゆぞツレニ上ホげにや思シトヤカニひ内ニにあればイ色ロ
外ホに現れカさむらニふぞオや何ニわくらニはニ

べき。その上^{ウエ}この須磨の浦に心
あらん人は。わざとも侘^ワびてこそ
住^スむべけれ。わくら^{中少困ナ}はに同^オふ人あら
ば須磨の浦に。藻^{詞モ}塩^{元庚シ}たれつゝわぶ
と答^エへよと。行^{ナキヒラ}平も詠^{エイ}ひ給^イひと
なり。又^{気ヲカヘ}あの磯^{イソ}邊^ベに一本の松のゆ
を人に尋^エねてゐ^エへば。松風村雨入

名を御名乗りへ
恥かきや

ル一太

申さんとすればわくらには言問

ふ人もなき跡の世にほろみて

オ一

らりずまのうらめしかりける心

ル下

半
タドキ中
サラシニ

かな　この上は何をかそのみ色

むべき。これは過ぎつる夕暮にあ

の松蔭の苔の下。亡き跡吊はれ

エツテ上条
優ニ寛ニ

同^ト人^ニあ^ラば^バの^ノ御^ミ物^ツ語^ゴ。あ^マり^リに^ニ
 な^ナつ^ツか^カう^ウひ^ヒて^テな^ナほ^ホ執^シ心^{シン}の^ノ閻^{エン}
 浮^フの^ノ涙^{ナミダ}ふ^フた^タび^ビ袖^{スリーブ}を^ヲ濡^ヌら^ラさ^サむ^ム
 ら^ラふ^フな^ナほ^ホ執^シ心^{シン}の^ノ閻^{エン}浮^フの^ノ涙^{ナミダ}と^トは^ハ
 今^{イマ}は^ハこ^コの^ノ世^セに^ニな^ナき^キ人^ニの^ノ言^{コト}葉^ハなり^リ。又^{マタ}
 わ^ワく^クら^ラは^ハの^ノ歌^カも^モな^ナつ^ツか^カし^シい^イな^ナど^ドと^ト
 承^{ウケ}り^リい^イ。夢^{カタガタ}不^フ審^{シン}に^ニゆ^ユへ^ヘば^バ。二^ニ人^ニと^トも^モに^ニ

月にも馴る須磨の海士の塩シテ 困カニ
焼き衣ヤロモ色替イロカへてシテ 中 運ビニ縁キヲの衣イのエ
中ソラ焼ダキなりイへシテ 中 困カニ 持ラ付ケかくて三年も過ぎ行
けば行平都ノボにより給ツレひウいく程
なくて世を早オうサ去り給ツレひウぬと聞
きシテ 中 困カニよりあウケテら戀カニやさるウケテにて
中イナイテイの世イの音イづれイをカニ松風カニも

公風

二

冬^ニら^セつ^ル。松^ニ風^ニ村^ニ雨^ニ二^ニ人^ニの^ニ女^ニの^甲
幽^イ霊^{レイ}こ^レれ^マで^デ來^リたり^タり。さ^ハても^モ行^キ
平^ヒ三^ミ年^トが^バ程^ニ。御^イつ^レれ^ヅれ^ノ舟^{フネ}
遊^アび^ビ。月^{ツキ}に^ニ心^{ココロ}は^ハ須^ス磨^マの^ニ浦^{ウラ}夜^ヨ汐^{オシ}を^ヲ
運^ハぶ^ブ。海^{ウミ}士^シ少^{オウ}女^メに^ニ。お^トと^トひ^ヒ選^エは^ハれ^レ
冬^{フユ}ら^セつ^ツ。折^セに^ニふ^フれ^レた^タる^ル名^ナな^ナれ^レ
や^ヤと^トて^テ。松^{マツ}風^{フウ}村^{ムラ}雨^{アメ}と^ト召^メさ^サれ^レり^リ。

に消え。憂き身なり。あはれ古
を思ひ出づればなつかしや。行平
の中納言三年はるに須麻石の
浦。都へ上り給ひしが。この程の形
見とて。御立烏帽子狩衣を残し
置き給へども。それを見る度に。や
増しの思ひ草葉末に結ぶ露の

村雨も袖のみ濡れてよしなやな。
身にも及ばぬ戀をさへ須麻のあ
まりに罪深し跡弔ひてたび給
う上歌同 関カミ
へお切 元ヤ 恋草の。露も思ひも乱れつ
つ。露も思ひも乱れつ。心狂氣
になれ衣の。己の日の。被や木綿
四手の。神の助けも波の上あはれ

心持シタシホメ
 と。捨ても置かれず取れば面影
 に立ち増さる。起臥わかで枕より
 あとより戀の心責めくれればせん
 方涙に伏し沈む事ぞ悲しき。物着
 三瀬川絶えぬ涙のうき瀬にも。
 乱る戀の淵はありけり。あら嬉
 やあれに行平のお立ちあるが。

間も。忘らればこそあぢきなや。
形見こそ今はあだなれこれなく
は。忘る隙もありなん。詠みし
も。理やなほ思ひこそは深けれ
シテ上 閑カ伸ビリ
宵々に脱ぎてわが寝る狩衣
同 スラリ
かけてぞ頼む同じ世に。住むかひ
あらばこそ忘れ形見もよしなし

行平よ。たとひ^{よ来スラリ}暫^{ハバ}くは別^ハる^ハとも。
待^ハつと^ハ聞^ハかば歸^ハり來^ハんと^ハつら^ハ
ね給^ハひ^ハ言^ハの葉^ハは如^ハ何^ハに^ハげ^ハに^ハ
な^ハう^ハ忘^ハれて^ハさ^ハむ^ハら^ハぶ^ハぞ^ハや^ハた^ハと^ハひ^ハ
暫^{ハバ}くは別^ハる^ハとも^ハ。詩^ハた^ハば來^ハんと^ハ
の^ハ言^ハの葉^ハを^ハこ^ハな^ハた^ハは^ハ忘^ハれ^ハず^ハ松^ハ
風^ハの^ハ立^ハち^ハ歸^ハり來^ハん^ハ御^ハ音^ハ信^ハ

松風と召されさむらよぞやいで
あきらうハツレサリ
浅まやその御心故に
こそ執心の罪にも沈み給へ安波
にこの妄執をなほ忘れ給はぬぞ
やあれは松にてこそへ行平は
御入りもさむらはぬものを
ての人のいひ事やあの松こそは

氣ラカヘ

シテ詞氣ラカケ

和一中スクラ

甲ヨクハル
氣ラカケ

の行平。立ち帰りこばわれも本

陰に。いざ立ち寄りて。磯馴松の。

なつかしや破之舞。お上。松に吹きくる風も

狂。て。須磨の高波はげき夜

すがら。妄執の夢に見みゆるなり。

わが跡吊ひて。たび給へ。暖申して。

歸る波の音の。須磨の浦かけて

拍子合
ノラズ

心持シノリヲ外ス心
心持シノリヲ外ス心

伸ビリト運ビラ付ケ
キリ上ノズル

公風

又ハ調子ヲ
トスルノ
ケラ受ケ
ナリ調子
音迄入ル

申一ツ
吹くや後の山角開路の鳥も聲
聲に夢もあとななく夜も明けて
村雨と聞きしも今朝見れば松
風ばかりや残るらん松風ばかり
や残るらん